

災害支援・教育復興にむけて

つなぐ



日教組災害対策本部

〒101-0003

東京都千代田区一ツ橋 2-6-2

HP:<http://www.jtu-net.or.jp/>

日教組被災地支援・教育復興ボランティア活動を通して（宮城第5ターム）

私は第5タームの一員として8月7日から11日までの期間で、宮城県の教育復興活動に参加させていただきました。今回の支援活動への参加に伴って、部分的ではあるが被災地の現状と被災者の言葉を見聞きすることができ、それらを通して復興支援の在り方について考えさせられました。

まず、支援活動の内容は、教育復興として子ども・学校・教職員に関わるものであり、第5タームでは、第1タームから継続している南三陸町の小学校内の清掃と石巻市内の小学校のプール監視補助でした。初日に活動場所の割り振りが行われ、私はプール監視補助に割り当てられました。私が、今回の支援活動に参加する前に抱いていた支援活動のイメージは、瓦礫撤去や泥のはき出しといったものだったので、プール監視補助に割り当てられたときは「わざわざ被災地に来てプールの監視補助をするのかあ」と思ってしまいました。しかし、その考えは、自分の価値観をもとに物事を捉えたものであり、現地の人々の思いや要望を配慮していない考えでした。プール監視補助として支援者が入ることで、これまで配置されていた現場の学校関係者の負担軽減につながり、それを現場の学校関係者が求めることであれば、それは意義のある支援活動であるといえるでしょう。このような被災者の求める支援を優先せずに、自分の価値観による一方的な支援を実施することは少なくないと思います。それは、活動期間中に現場の先生からの話のなかでも聞くことができました。震災直後に全国から支援物資としてインスタント食品が送られてきたとき、ガスが復旧していないためにそれを温める器材が無く、仮にそれを温められたとしても、配ぜんする人手が足りなかったという状況があったそうです。このように、物的支援で自己完結してしまっている支援者側と人的支援を求める被災者側とのミスマッチがあるということを知りました。

プールの監視補助は、天気にも恵まれ、真夏らしい日差しと明るい子どもたちの笑顔に包まれて行きました。私もプールの中に入り、子どもたちに泳ぎ方を教えたり、一緒に水遊びをしたりしました。プールの監視補助を行った石巻市立開北小学校のプールには、開北小学校の他に2校の小学校の子どもたちが来ており、3校の子どもたちが期間中、午前午後ローテーションをして利用していました。プールの休憩中に3校それぞれの子どものたちと会話をしていると、同じ石巻市内に住む子どもたちでも、内陸部・沿岸部の震災による被害の違いや震災後の生活のなかで感じるストレスの違いがあると感じました。震災後に給食のメニューが少なくなったこ



○開北小学校でのプール監視補助○  
人懐っこく元気いっぱいのこどもたち

と、学校の体育館が避難所になっているので体育や部活動の制限があることについて話す内陸部の子どもたちに対して、震災の被害が大きかった沿岸部の子どもたちは、通っていた学校に通えなくなったこと、内陸側の学校へ移り通っていることで受け入れ側の学校の子もたちとうまく馴染めないことについて話していました。震災の被害だけでなく、生活や学習環境が変化したことでもさまざまな面でそれぞれのストレスを子どもたちが感じていることを知りました。

今回の教育復興の活動を通して見聞きした体験から、支援活動の在り方として、被災者のニーズに合わせて支援をすることを意識しなければならない、そのためには被災者の声に耳を傾け、何を求めているのかを確認することが重要なのではないかと感じました。さらに、ひとくちに被災者といっても抱える現実はさまざまであり、時が経つにつれて変化している被災地の現実に即した支援を意識しなければならないのだと感じました。そして、支援活動を行うのは、もちろん人ですが、一人の一過性の支援活動で終わるのでなく、人から人へ「つなげて」継続的な支援活動をし、現在被災者が求める支援に柔軟に対応していくことが大切なのでしょう。

主にプールの監視員として活動したなかで印象強かったのは、子どもたちの屈託のない笑顔と明るさでした。さらにそれは、見守る先生方や保護者にも笑顔や明るさを与えているように感じました。今後、復興の担い手となる子どもたちへ学習環境を整えることを優先しながら、共に震災からの復興へと建設的に関わっていけたらよいと思います。そこで、教職員としてできることは子どもたちに今回の震災に関することを伝え、復興への活動について共に考え、復興への継続的な支援活動をつなげていくことでしょうか。今回の被災地支援・教育復興ボランティア活動に参加し、支援活動を実施させていただけたことで多くのことを考えさせられました。この経験と学びは、これから子どもたちや多くの人に伝えて「つなげて」いくときの指針や根拠として貴重なものになると思います。

最後に、今回の被災地支援・教育復興ボランティア活動の機会をいただけたことで、被災地に入り、被災者の要望する支援活動に直接関わることができ、この活動を通して貴重な学びと経験を得ることができました。そして、ひとりの力ではなく、高い志・情熱を持った第5タームの諸先生方と力を合わせ、復興に関する活動と考えを共有できたことは嬉しかったです。このような貴重な機会をくださった被災地の学校関係者のみなさまと日教組本部の大杉さんをはじめ、多くの関係者に心から感謝をします。



○プールサイドにあったポスター○  
復興にむけて心の支えとなるのは仲間

## 「教育復興支援ボランティア活動に参加して」（宮城第5チーム）

「ボランティアとは何かをさせてもらうことで、学ぶことである」・・・ある本に書かれていた一節です。

わたしは、今回のボランティア活動に参加して、たくさんのことを学びました。活動場所は宮城県南三陸町立名足小学校。現地に向かう途中、一面に広がる田んぼや畑をみて、なんてきれいなところだろうと思いました。しかし、景色はだんだん変化していきました。ほこりっぽい空気。潰れた車の山に、がれきの山。残っているのは家の基礎のコンクリートだけ…そこに、お花やお酒が供えられているのをみて何とも言えない気持ちでいっぱいになりました。目をそらしたくなる光景が一面に広がり、復興には、まだまだ長い時間が必要だと感じました。

名足小学校は、1階と2階の一部が浸水し、子どもたちは現在、近くの伊里前小学校に間借りした状態で通っています。



【トロフィーの泥を落とす活動】

1・2日目は2階の各教室の清掃などをしました。1カ月ほど遅れて卒業式が行われ、教室の黒板には「卒業おめでとう」の文字やメッセージが書かれており、胸が熱くなりました。泥水をかぶっているので、図書室の本や理科室の備品などの多くは使える状態ではありませんでした。校舎1階にあったであろう各フロアーや賞状も泥だらけでしたが、丁寧に泥を落とす作業を行い、きれいになっていく様子に嬉しくなりました。

3日目は1階の清掃活動でしたが、1階は全部が浸水しているので泥が残っていたり、壁がくずれていたりと、とてもひどい状況でした。海の水がこんなところまできたのかと思うと本当におそろしく、津波がすごかったのだろうと思いました。「どこまでできるかわからないけれど、やれることをやろう」とみんなが協力し、団結できた瞬間でした。

この3日間を通してできたことは、本当に小さなことで、「もっとこうしたかった」という部分もあり、もどかしい気持ちです。名足小の校長先生は「小学校としてももう一度再開することは難しいかもしれない」とおっしゃいましたが、母校の名足小学校で卒業式がしたいと言っている子どもたちがいるそうです。その思いが実現することを願っています。そして、私もいつか元気な子どもたちの笑顔あふれる名足小を訪れたいと思います。

被災地に行くまでは、悲しい現実を目をそらし、テレビや新聞で報道されているのをさけてしまうこともありました。今回、自ら活動支援を行うことで、被災地を身近に感じることで、現実を知るといふことの大切さを感じました。離れているけれど、被災地で感じたことを忘れず、子どもたちにしっかりと伝えていくこと、それが、これからの私にできる”ボランティア”でもあります。



【被災した教室の清掃】